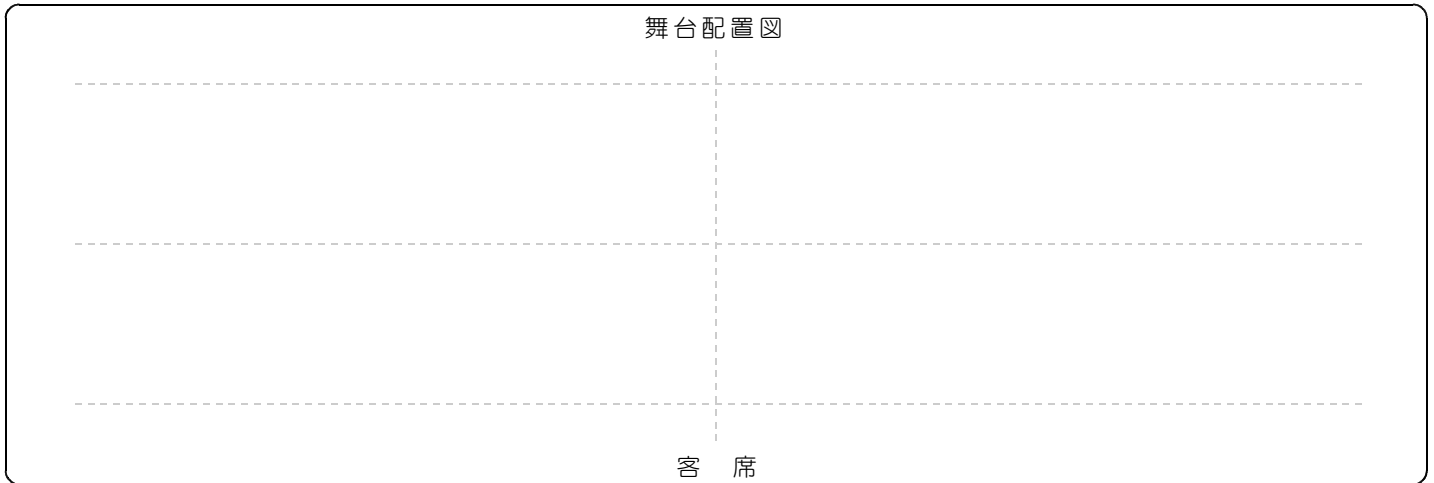


No.	尺八箏17絃による	演奏者数	演奏時間
文字絵			



表示記号一覧	一 箏	= 17絃	+ 三絃	0 尺八	≠ 他楽器	* マイク	□ モニター	□ 毛氈	W 屏風
立奏	立奏台	大 台	小 台	椅子	大 台	小 台	譜面台	台	ハイター 枚
座奏	琴台	台	見台	台	山台	録音 有：無	録画 有：無	他	
始	緞帳：暗転	板付	毛氈 緋：紺	音響					
終	緞帳：暗転	板付	屏風 金：銀	照明					

調絃表	ピッチ A=44				編成：1箏				2箏				17絃 尺八				
Part	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	斗	為	巾				
1 箏					G#												
	<b>B</b>	<b>D</b>	<b>D#</b>	<b>E</b>	<b>G</b>	<b>A</b>	<b>B</b>	<b>D</b>	<b>D#</b>	<b>E</b>	<b>G</b>	<b>A</b>	<b>B</b>				
								C#									
2 箏								E			C		E				
	<b>D#</b>	<b>F#</b>	<b>G</b>	<b>G#</b>	<b>A</b>	<b>B</b>	<b>D</b>	<b>D#</b>	<b>G</b>	<b>A</b>	<b>B</b>	<b>D</b>	<b>D#</b>				
17絃			E				C		E					C			E
	<b>A</b>	<b>D</b>	<b>D#</b>	<b>F</b>	<b>G</b>	<b>A</b>	<b>B</b>	<b>C</b>	<b>D</b>	<b>D#</b>	<b>F</b>	<b>G</b>	<b>A</b>	<b>B</b>	<b>C</b>	<b>D</b>	<b>D#</b>
								B									
	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	1	2	3	4	5	6	7

編成欄には面数を記入 開始調絃は太字 転調は上下の欄 ハーモニックスは右肩に○

尺八 箏 十七絃による文字絵 MOJIE ■ 作曲年 1971年 ■ 委嘱者 -

■ 構成 箏 十七絃 尺八 ■ 時間 10分 ■ 出版楽譜 無し

■ 解説 この曲は初演されたのが、今から七年位前で、名古屋のNHKから放送による初演だったように記憶しております。かなり前の事なのでこの曲を書いた動機等、はっきりとは覚えていませんが、最初箏と十七絃の二重奏曲として書き初めたつもりが、書き終わった時には、何時の間にか尺八が加わっていたという変わった書き方だった記憶があります。内容はその時点ではエッセイ風な作品というつもりで、タイトルにも“尺八 箏 十七絃によるエッセイ”と付けておりましたが、今回再演にあたり少し書き直し、タイトルも“尺八 箏 十七絃による文字絵”と改めました。文字絵というタイトルからは様々な鑑賞のイメージも湧き、自由な鑑賞の仕方を望んでいるのですが、或るいは、現代書道の展示会の中に自分を置いたつもりで聴くのも一つの面白い方法かもしれません。実はこのヒントは昨年秋ヨーロッパの演奏旅行した際、パリのソルボンヌ教会で書道の展示会を見たことにあって、“文字絵”というタイトルを付けた動機もそこにあります。